

活動ピックアップ!

中之島
地域
Nakanoshima

お茶を通して地域の魅力を伝える
なかのしま茶会実行委員会



子どもたちにふるさとへの愛着を持ってもらいたいとの思いから、月に1回学校を訪問し、中之島の偉人や伝統行事の紹介をしています。茶道を嗜んでいたメンバーがいたことがきっかけとなり、地域を巻き込んだお茶会を開催。お茶を飲むだけでなく、自分でお茶を点てる体験の場も提供しています。今後は活動の輪を広げ、福祉施設や高齢者施設などに出向き、誰でもお茶を楽しむ機会をつくっていききたいと思います。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 長岡 みんなのSDGs

8 職人のいる 工場がある
地域との関わりで生まれる、より豊かな異国生活
株式会社アドテックエンジニアリング



電子機器のプリント基板を作るための機械「露光装置」を作っています。2020年頃から外国人の方の採用を開始。多言語対応や生活環境の充実など、多国籍の従業員が共存する職場環境づくりに取り組む中で、地元三島の竹あかりイベントに運営メンバーとして参加させていただくようになりました。地域との関わりは、異国の地で働く彼らにとって職場以外の方との貴重な交流の機会になっています。

市民活動

虎の巻

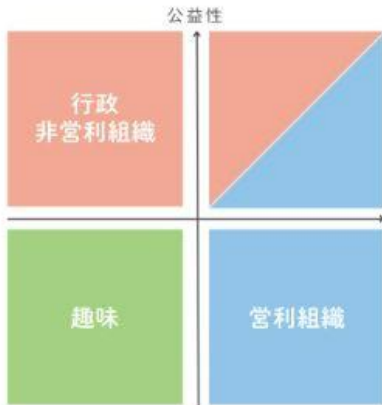
研究テーマ

法人格の選択：NPO法人と株式会社



より詳しく
知りたい方は
こちら!

市民活動団体は、法人格を取得することで、より活動しやすくなることもあります。また最近では、「ソーシャル・ビジネス」として株式会社が社会課題に取り組む例も増えています。今回は、NPO法人と株式会社の違いを紹介します。



NPO法人と株式会社

NPO法人は、社会課題に対処するための法人格です。公益性を重視し、税制上の優遇措置があるなど、社会的信頼を得やすい利点があります。運営資金は主に寄付や助成金、事業委託費などでまかなわれます。一方、株式会社は利益を追求する法人格で、社会課題にも商品やサービス提供を通じて取り組み、事業拡大や雇用の促進を目指します。

活動分野の収益性から考える

一般的に、「NPO法人＝ボランティア」といったイメージがあり、十分な対価を受けることが難しいケースもあります。そのため、解決したい社会課題が収益性の高い分野であれば、株式会社が有利です。株式会社は対価を求めると

が一般的で、収益性にに基づき出資や借入れなどの資金調達も可能です。一方、NPO法人は収益性の低い分野でもボランティアや寄付などで持続可能な活動ができます。

活動する仲間から考える

NPO法人はボランティアや外部パートナーとの協力を重視し、幅広いメンバーが活動に参加するケースがよく見られます。一方、株式会社は主に雇用された従業員が事業に従事するため、人々を動かすには常にコスト意識が必要です。多くの仲間と共に活動したい場合はNPO法人が、生計を立てる仲間と活動したい場合は株式会社が向いています。

最適な法人格は、組織のビジョンや目標に応じて異なります。社会的なイメージや収益性、雇用に関する要因を考慮し、自身の活動に適した選択をしましょう。

センターからのお知らせ

団体同士のマッチングをサポート 協働マッチングリスト2023

「協働マッチングリスト」は、協働センターに登録した団体のうち、「協力できること」と「協力してほしいこと」の公開を希望した団体のリストです。他の団体とコラボしたい方や地域活動に関わりたい方、イベント参加や寄付で団体の力になりたい方は、ぜひご覧ください!

入手方法

- 協働センターホームページ「コライト」からダウンロードQRまたは、ホームページにあるバナー「協働マッチングリスト」からアクセスしてください。
- 協働センターで受け取る(数に限りがあります)



発行

ながおか市民協働センター
〒940-0062
長岡市大手通1丁目4番地10
シティホールプラザオーレ長岡 西棟3F
Tel . 0258-39-2020
Mail . contact@nagaokakyodo.net



「+カ」知る、つながる、好きになる
「+カ」つながるラジオ
「+カ」市民活動のポータルサイト コライト

配布場所 長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。



知る、つながる、好きになる
ながおか市民活動情報誌

2023

10
vol.
130

二刀流で取り組む鳥獣被害対策



特集

特定非営利活動法人
新潟ワイルドライフリサーチ
株式会社ういるこ
山本 麻希さん

NAGAOKA PLAYERS
小野 英子さん

活動ピックアップ
なかのしま茶会実行委員会

長岡みんなのSDGs
株式会社 アドテックエンジニアリング



ながおか市民協働センター

二刀流で取り組む鳥獣被害対策



山本 麻希さん 特定非営利活動法人 新潟ワイルドライフリサーチ/株式会社ういるこ

長岡技術科学大学の准教授として地域の獣害対策に関わる傍ら、2011年に任意団体として新潟ワイルドライフリサーチを設立(2014年にNPO法人化)。また2015年より、「一般社団法人ふるさとけものネットワーク」の代表として、獣害対策のプロを育てる「けもの塾」を主宰している。2018年に「株式会社ういるこ」を立ち上げ、鳥獣被害対策のコンサルティングや研修に取り組む。

社会課題に取り組む法人と聞くと、多くの人が最初に思い浮かべるのは非営利法人ではないでしょうか。しかし「非営利団体=無償のボランティア」というイメージから事業単価を上げられず、十分な対価の要求が難しいことも。一方、最近ではビジネスとして利益を生みながら社会課題に取り組む企業も出てきています。今月号では、非営利法人と営利法人の二刀流で鳥獣被害対策に取り組んでいる山本麻希さんに、任意団体の立ち上げから現在までのお話を伺いました。

任意団体からNPO法人へ

まずは、任意団体として「新潟ワイルドライフリサーチ」を立ち上げた経緯を教えてください。

山本麻希さん(以下、山本):新潟ワイルドライフリサーチは、それまで新潟県で十分に行われていなかった正しい鳥獣被害対策の普及啓発活動や科学的データの収集を行うことを目的に、2011年に設立しました。主に鳥獣被害対策に関わるコンサルティング

や調査研究、教育研修を行っていました。

—2014年にNPO法人化されたのは、なぜですか。

山本:年間予算が1,000万円を超え、任意団体の事業規模では収まらなくなってしまったからです。また法人化することによって融資を受けたり、銀行口座やクレジットカードを作ったりすることができるという理由もありました。

—なぜ、法人格の中からNPO法人を選ばれたのでしょうか。

山本:情報を開示するオープン性や、事業の公共性、行政から安心して仕事をお任せいただけるイメージの良さなどNPO法人の特徴が、私たちがしている活動と親和性が高いと思ったからです。所轄庁への報告や法務局への登記など大変な部分もありますが、法人化する価値があると思いました。

そして、企業化

—NPO法人として活動してみて、いかが

でしたか。

山本:経理や運営に係る資金を確保する難しさを感じました。NPO法人の場合、事業費は補助金や助成金でカバーできますが、人件費は対象になりません。当時は、私も含めた理事が無償で事業に関わっていたから、何とか運営できている状態でした。

—2018年に、株式会社ういるこを立ち上げられました。

山本:鳥獣被害の問題を解決するにはプロを育てる必要があり、そのためにはきちんと人を雇用する必要があると考えました。

—実際に経営してみて、いかがでしたか。

山本:起業後3年目で2,000万円の赤字を出してしまいました。このままではまずいとコンサルティングを受けたところ、指摘されたのは受注単価の安さでした。起業当初に、NPO法人の頃よりも値上げしていましたが、見通しが甘かったですね。健全経営のためにも、受注金額を上げていく必要があると痛感しました。

—どのように、その問題を解決されたのでしょうか。

山本:適正な受注単価を算出するため、建設会社が国土交通省から受注する際の技術者単価などを基に新価格を設定し、それまでの取引先に価格変更のお願いをして回りました。「高い」と言われたり、取引がなくなったりもしましたが、8割の方が継続してくださいました。

—NPO法人と株式会社に対するイメージの違いを感じられたそうですね。

山本:日本には「NPO法人=ボランティア」



新潟ワイルドライフリサーチが学校で講演を行っている様子。



ういるこで行っている捕獲研修の様子。

というイメージが根深くあり、NPO法人が高い価格を設定してしまうと「NPO法人なのに、どうしてお金を稼ごうとするの?」と思われるがちです。一方、株式会社は営利団体なので、値上げをしても比較的受け入れてもらいやすいのではないかと思います。

法人格を使い分ける

—現在、新潟ワイルドライフリサーチというこの事業の線引きは、どのようにされていますか。
山本:予算取りしやすいコンサルティング事業や指導者研修は株式会社であるういるこで、予算はないが社会的に必要な調査や教育機関での講演はNPO法人である新潟ワイルドライフリサーチで行っています。

—団体の法人格を選ぶ上で大切なことは何でしょうか。

山本:自分たちの目的に合わせて、活動しやすい法人格を選ぶことです。活動を事業化することはNPO法人でも株式会社でもできますが、世間のイメージによって、驚くほど対応が違います。世間のレッテルと戦うぐらいなら、自分がやりやすい形態を選ぶのも一つの手ではないでしょうか。

社会課題の解決には、行政や企業、市民活動団体など異なる主体が力を合わせて取り組むことが必要です。それは、それぞれに得意なことと苦手なことが違うから。今月号で取り上げたのは、非営利法人と営利法人のメリット・デメリットを押さえた上で、両方を上手に活かしながら課題の解決に取り組んでいる例でした。裏面「市民活動 虎の巻」では、法人格の選択について解説しています。そちらの記事も合わせてお読みください。

NAGAOKA ウワサのあの人にインタビュー! PLAYERS

小野 英子 さん (50歳)

農家 小野ファーム

1973年長岡市中之島生まれ。実家の農業に従事する傍ら、よさこいサークルすいれん代表、中之島コミュニティセンター推進協議会副会長を務める。



農業から生まれた、 みんなの得意が輝く場

中之島で家業である農業に従事している小野英子さん。21歳で就農し、家業に入りました。農業はとて地道なものに見えて、自分には向いていないと感じていたそうです。華やかな職業に憧れる時期があり、ふいに父親に対して「何でこんなやってるんだらう」と心情をさらけ出すこともあったそう。

27歳の頃、「せっかくこの地域に住むなら楽しく住みたい」「自分も周りも輝くことで、地域を活性化したい」という想いでよさこいチーム「すいれん」を立ち上げ。その3年後、7.13水害や中越地震の際に多くの方からいただいた支援に対する感謝を伝えようと「結」という曲を作成し、今でも踊り継がれる曲となりました。この活動を通じて、自分を表現する場や、人とのつながりの大切さを感じられるようになったと言います。

38歳で一度農業から離れてアパレルの仕事に転職。美容や健康に携わる中で、美しく健康に過ごすためには心の豊かさや食が大切であることに気づかされ、同時に農業分野の重要性にも気づくことができたそう。それから、再び農業に携わることを決意し、2022年1月からもう一度

家業に入りました。

農家であることを活かして、多様な人が集う笑顔あふれる場を作りたいと考え、自宅のビニールハウスを農閑期限定で活用できるようにリノベーションを行いました。そして、2022年11月に「EKO~source of life~」をオープン。ハウス内でアート作品の展示や大人も子どもも楽しめるイベントを始め、ロコミやSNSで活動を知った方々が集まるようになりました。

「ハウスに出展された方々の多くが地元中之島の方で、周りには才能のある方がたくさんいます」と笑顔で話す小野さん。誰も得意不得意があるのは当たり前。これからもそれぞれの得意が最大に活かされるように人をつなぎ、地域の活性化につながる場所づくりをしていきます。



チームすいれんで2022年のいがた総おどりに参加した際の集合写真。



ビニールハウスをリノベーションし、オープンした日の様子。

活動の根っこ

みんなの得意が
輝くハウスで...
つながる心

小野英子